

BOOK Review

世界一わかりやすい 「医療政策」の教科書

評者 二木 立 日本福祉大名誉教授



本書は、米国の公衆衛生大学院で教えられている、セオリー（理論）とエビデンス（科学的根拠）の両方を兼ね備えた「医療政策学」のエッセンスを、日本にいながら学べることを意図した野心的教科書です。著者の津川友介さんは、東北大学医学部を卒業し、日本で臨床研修をした後、米国のハーバード大大学院で医療政策学を学んで博士号を取得し、現在はカリフォルニア大ロサンゼルス校（UCLA）で医療政策学の教鞭をとっている新進気鋭の研究者です。

医療政策学とは単一の学問ではなく分野横断的な学問であり、津川さんは、それを（1）医療経済学、（2）統計学、（3）政治学、（4）決断科学、（5）医療経営学、（6）医療倫理学、（7）医療社会学の7つの学問を統合したものとして把握し、それぞれのポイントを1～7章で順に説明しています。8章「オバマケアからトランプケアへ—アメリカの医療制度の現状」は、2010年の「オバマケア」成立から、トランプ大統領がその廃棄を執拗にめざしている直近の動きまで、米国の医療政策上の論点を簡潔に描いています。

これら全8章のうち、津川さんが得意とする（1）と（2）に全体の6割が割かれています。この2章は「中級書」レベルで、「世界一わかりやすい」とは言えず、襟を正して読む必要があります。1章「医療経済学」では医療経済学の主要な論点が、最新の実証研究を丁寧に紹介しながら、異説の紹介を含めてバランス良く書かれています。その

中の8では、医療費増加の主因は医療技術進歩との米国の医療経済学の常識とは異なる私の実証研究も紹介されており、うれしく思いました。2章「統計学」は「中級の上」レベルで、統計学の初学者が全てを理解するのは難しく、津川さんの『「原因と因果」の経済学—データから真実を見抜く思考法』（ダイヤモンド社、2017、中室牧子氏との共著）と併読することが望ましいと思いました。

それに対して、3～7章は「入門書」レベルで、大変わかりやすく書かれています。日本では費用効果分析は医療経済学と同じとの誤解が根強くありますが、津川さんがそれを「決断科学」（4章）として説明しているのは見識があると感じました。「3 費用対効果分析の注意点」（方法的な注意点と倫理的な問題点）は本書の白眉といえます。5章3の「医療におけるP4Pのエビデンスは弱い」も説得力があります。他面、3章「政治学」が米国政治学の4つの一般理論の簡単な説明だけで終わっているのは残念です。これについては、他の著作—島崎謙治『日本の医療—制度と政策[増補改訂版]』（東京大学出版会、2020）や拙著『医療経済・政策学の探究』（勁草書房、2018）など—の併読をお勧めします。

本書のもう一つの魅力は、医療政策学の基本用語が全て原語（英語）でも示されていることです。医学の場合と同じく、医療政策学でも専門用語を英語でもきちんと覚えることは、勉強の次のステップに進む場合、大いに役に立ちます。

津川 友介 著

A5判/288頁/2020年/定価3,300円（本体3,000円＋税10%）/ISBN978-4-260-02553-9/医学書院刊